

欧米仏教会の現況と将来

——欧米出張旅行報告書——

岡 邦 俊

序 文

昨一九六二年は、日本の仏教が公式に米国土に伝来し紹介されてから恰も七十年に当る年であった。即ち、一八九三年九月にコロンプスのアメリカ大陸発見四百年記念のため、世界博覧会がシカゴ市で開催されたが、これと同時に世界宗教大会が同市で開催された。この世界宗教大会に日本の仏教界からも臨済宗の釈宗演、真言宗の土宣法



ニューヨーク仏教会にて

竜、天台宗の芦津実全、真宗の八淵幡竜の四師が出席して、講演や文書によつて日本の仏教を紹介し伝道した。この年を「仏教東漸七十年記念」として、東京

とニューヨークに「仏教東漸七十年記念会」が設立され、種々の記念行事を計画し実施した。その中でも「日米仏教文化会議」は、日米両国の仏教史上とくに重要な記念行事であった。

古来仏教経典の中には、仏教は漸次に東に伝来するとの「仏教東漸」が説かれている。先ず仏教は西紀六七七年に印度僧によって後漢の明帝に経典が伝えられ、中国仏教形成のもとをなしたのである。次いで西紀五五二年には、百済の国王は仏像経典を吾が国の欽明帝に献じたが、これが日本の仏教の誕生となったのである。日本の仏教はその後種々の事情で東漸の機を得ず千年以上も停滞したのであるが、ついにその機を得て公式にアメリカ本土に紹介されたのが前記のシカゴ世界宗教大会であった。米国では、シカゴを初め、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、パークレイ、デンバー、ニューヨークの六ヶ所で行なわれ、日米仏教文化会議が催され、四十数名の日本側代表がこれに参加出席した。私も幸いにこれ等の諸会議に日本側代表の一人として出席し、併せて他の幾つかの米国仏教会を訪問し、講演し、座談し、協議する機会を恵まれた。更に米国滞在中私は若干の宗教施設、大学を見学する

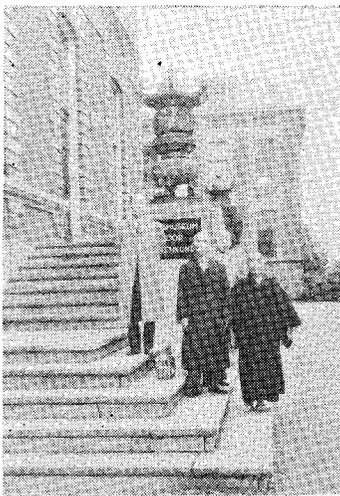
ことが出来たし、特に、ワシントンでのホワイト・ハウス訪問とアーリントン国立墓地の公式参拝は忘れられない思い出である。

米国での三週間の諸会議、訪問、視察を終了した私は、他の二十五名の代表と共に更にヨーロッパの仏教会、宗教施設の訪問と見学のためニューヨークよりロンドンに渡った。先ず英京ロンドンの仏教会との懇談会に出席し、つづいて、ハンブルグ、ベルリン、パリ、ウィーンの仏教会を訪問し協議懇談する機会を恵まれた。この間私はこれら諸国のキリスト教関係の寺院、施設を訪問し、又いくつかの大学をも見学した。特に、ローマのヴァチカンでの法皇ヨハネス二十三世との懇談、バンコックでの寺院見学、ホンコンでの中国仏教関係者との懇談も私にとって大きな収穫であった。一ヶ月余のヨーロッパ滞在とアメリカでの三週間を通じて約二ヶ月間に私は十一ヶ国、二十八都市を訪問し見学した。この旅行で得た私の収穫はまことに大きかった。何れ機を得て詳しい旅行記をまとめたいと思うが、今ここでは主として欧米での仏教会の現況とその将来についての私の考えを述べ、報告書の一部としたい。

一 米国の仏教会と仏教学界

最近アメリカでは仏教の研究や信仰が盛んになり、特に「禅ブーム」とさえいわれている。広く日本文化への興味と理解が深まって来たともいわれている。私はこの目でその実状をたしかめたかったのであるが、今回のアメリカ訪問の機はまことに好機会であった。極めて短期間であり、私の接触した範囲も亦限られたものであって、到底十

分なる研究視察は出来なかったが、この目で見、この耳で聞いた米国の仏教会は果してどんなものであったか。結論的にいえば、私は米国の仏教は「これからだ」と感じた。米国の仏教といってもこれを大別して二つになると思う。一つは仏教の研究という面と、いま一つは仏教の信仰という面にしぼられると思う。前者は米国の大学を中心とする所謂学者の研究であり、それも多くの場合は仏教を単独に専攻し研究するというよりも、広く東洋研究なり東洋学の一分野として研究されている場合が多いようである。これらの分野領域での仏教の研究は幾多の学者によってそれぞれの研究がなされ、中には甚だすぐれた成果が発表されている。アメリカの大学に於けるインド学、仏教学等に関する学界の報告が中村元博士によってなされているが、『印度学仏教学研究』第十巻第一号）それによってみて仲々活発に広範囲になされている。イェール大学、ハーヴァード大学、コロンビア大学、シカゴ大学、カリフォルニア大学を初め、プリンストン大学、ペンシル



ニューヨークコロンビア大学にて

ヴァニア大学、ウイスコンシン大学に於ても、仏教美術、インド哲学等の研究が盛んであり、特に、ウイスコンシン大学では米国で初めての仏教の専攻課程を設

け、仏教の研究によっても博士の学位を授与されることになったことである。又、ハワイ大学でも「東西センター」を中心に仏教方面の研究も極めて活発である。

私はアメリカ滞在中ニューヨークのコロンビア大学とロスアンゼルスのカリフォルニア大学を訪問し、コロンビア大学では日本人教授の羽毛田義人氏にお目にかかり、又、カリフォルニア大学の足利演正教授にもお目にかかり色々とお話を聞かせてもらった。ニューヨーク滞在中には、エール大学のガード教授、ワシントン大学教授のライデッカー教授とも会談し、米国人の仏教研究について、更に、米国人の仏教信仰についても語り合った。

実際には米国では、日本と同様に、仏教研究と仏教の信仰とか生活とが別々に分れているようである。研究は大学の教授連がそれぞれ好きな分野でやっている。仏教の信仰や生活は大学とは全く関係なく、日本人の手によって運営されている「仏教会」には殆んど彼等教授の研究者は訪れることをしない。研究は研究、信仰は信仰と割り切っており、仏教がはっきり二つのグループに分れた形となっている。これは仏教自体にとって重大な課題でなければならぬ。即ち、米国でも、日本と同様に、仏教を単なる学問研究の対象としており、知識欲の満足としてこれを求め、生活と実践との具体的指導原理とは考えられていない。謂はば仏教界が仏教会と仏教学会とに二分されているような米国仏教と日本仏教との現状は、将来の仏教界にとって大きな問題点となるのではなからうか。即ち、米国の仏教は、大学の教授を中心とする知的興味からの研究と、信仰と生活とを中心とする各地の仏教会

の諸活動との二つの分野に属するものである。私の会った大学の教授は、殆んど異口同音に、米国の仏教は今の段階では研究の範囲を出でず、信仰として仏教を受け容れている米国人は極めて少数であるとのことである。禅ブームでさえも、それは鈴木大拙博士の著書と講演とによる知的興味の範囲を出でず、坐禅そのものの宗教的実践に専心する者は数多くはないようである。ある米人教授は禅ブームは日本の創価学会にも比すべきものと批評していた。ともあれ、日本であれ、米国であれ、仏教がこのように「仏教会」と「仏教学会」との二つの世界に分れていることは望ましい状態ではない。日本の仏教学会はその研究のレベルに於ては欧米での仏教研究に勝るとも劣らぬものといえようが、それほど仏教の研究が盛んであっても、仏教が人間の生活と信仰の中にあつてどれほどの指導力を持つていたのであろうか。卒直にいつて仏教研究が盛んになるにつれて、むしろ生きた仏教信仰、仏教生活は衰微しているのではないかとさえ思われてならない。米国での仏教研究が仏教の信仰と生活に、大きな影響力と指導力を持つて日が果して近き将来訪れるであらうか。

さて、私はここでは主として米国の仏教会についての問題を取り上げてみたい。具体的にいつて、米国の仏教会はハワイを初め米本土にも相当な数に上っている。西本願寺系の仏教会が数に於ては圧倒的に多く、ハワイに三十六仏教会、米本土に五十仏教会、カナダにも十七仏教会がある。その他の宗派でも曹洞系の禅宗、浄土宗、日蓮宗、真言宗、東本願寺系の仏教会が米国の主要都市にはあり、それぞれ活発な宗教活動を行なっている。

これらの各宗派の仏教会は、殆んどが日本から派遣された開教使を中心とする日系米人の集団である。各宗派の仏教会は、多少の相異はあっても、大部分は日本仏教の延長であり、集って来る人々も殆んどが日系人ばかりである。そして、米国仏教会のいま一つの特徴は、各宗派の独自の特色ある教義をはっきり表面に打ち出す代わりに、一般には通仏教的教義を中軸として、その周辺に多少の各宗派の特色を出しているということである。殊に、西本願寺系の仏教会ではアマダ仏の信仰やお念仏というものが、日本でのようにはっきり打ち出されていないようである。これは恐らく、米国市民の大多数が信じているキリスト教の教義や信条と余りに類似しており、却って通仏教の修道主義に反しているとの誤解と非難とをさけるためであろう。ともあれ、これらの日本人開教使の手によって経営されている仏教会には、米国人なり他の白人は極めてすくない。通りすぎて行く旅行者が異国趣味と観光の目的で仏教会を訪れる人はあっても、定住した米国市民なり白人が毎日曜に仏教会のサービスマに参加し、日頃も仏教的生活をしているというような例は甚だすくないようである。仏教会に出入している白人は、概ね一風変わった人が多く、さなくば仏教会を利用せんとする人である、といったような話も聞かされた。私の接したある仏教会での白人信者もそのような気がしてならなかった。特に、白人で仏教僧侶になって日本人の仏教会で働いている人の中には、こんな型の変わり者が多いようである。十分に仏教の研究もせず、聞きかじり、読みかじりの自称白人仏教徒を簡単に僧籍に入れることは注意すべきことである、との意見も日米仏教文化会議でも出たほどであった。教

育、環境、伝統を異にする白人が仏教を信仰するということは、さほど容易なことではあるまい。白人の仏教信者が日本人の仏教会ですくないのには、他にも色々な原因が考えられるであろう。その主なるものは、仏教会の日本人開教使が英語を十分にマスターしていないこと、それに、英文による適当なテキストが不足していることであろう。自由に英語で説教し得る有能にし人格のすぐれた開教使と、英文テキストが十分利用出来るようになれば、仏教会にもっと多くの白人を訪れるであろう。もとより仏教の伝道は単なる語学の問題では決してない。言葉は思想や教義を相手に伝達する手段でしかなく、最も大切なものは、彼の言葉を通して伝達されるその思想と教義である。従って、今後の米国に派遣される開教使は、英語が十分であるということも大切であるが、更に重要なことは彼の仏教的信念と仏教的知識とである。極めて困難な条件ではあるが、この二つの条件のみたされたと開教使さえいるならば、米国の仏教会にも多くの白人が参集するであろう。

白人が仏教会にすくないことは以上に述べたが、次に私は仏教会と日系人との問題をとり上げてみたい。ハワイのホルル、米国本土のサンフランシスコ、ロスアンゼルス、パークレイ、デンバー、シカゴ、ニューヨークといったような主要都市とその周辺には立派な各宗派の仏教会があつて、みなそれぞれに活発な宗教活動をつづけている。日本の仏教徒にとって最も注目すべき、むしろ、うらやましいことは、これらの仏教会はみなキリスト教会と同様に、毎日曜に礼拝行事を行なっていることである。所謂サンデー・サービスは米国の仏教

会の最も主要な行事であり、多数の日系人が参加して仲々盛況である。日本の国内で毎日曜に礼拝と説教とをやっている寺院が果して何ヶ寺あるであろうか。而も米国での日曜礼拝は日本語と英語との二つを毎日曜に行ない、日本語の分る老人や中年は日本語の礼拝に出席し、英語の方が分りやすい中年以下の二世、三世は英語の礼拝に出席するのである。ここにも米国の仏教会の複雑さと困難さがある。日本ではとても想像し得ないことであろう。更に、米国の仏教会ではこの日曜礼拝の後で、小学校・中学校の生徒を中心のサンデー・スクール日曜学校を年令別の幾つかのクラスに分けて、日本語の勉強を中心に色々なことを勉強している。仏教の話をここでも聞くわけである。ホルルの西本願寺別院のように日本語学校を独立して持っている大きな仏教会もある。日曜学校をかけたの開教使は日曜日は全く忙しい、体がいくつあっても足りない多忙さである。何十哩、否、何百哩もの遠くへ車を走しての活躍振りはまだことに立派であり敬服する。これだけの努力をしている仏教会ではあるが、その仏教会所在地に住む日系人が全部仏教会の会員であり、日曜礼拝に参加しているか、という実状はそうではない。正確な数字は不明であるが、前記のような大きな仏教会の中には、何千という会員を持ったものもあるが、その地に住む日系人の凡そ三分の一度の会員と推定されている。その地に仮りに三千人の日系人が居住しているとすれば、約千人が仏教会の会員で、残りの三分の一はキリスト教会へ、他の残りの三分の一は無宗教である、というのが概況である。もともと仏教会は日本移民の集会の場所、語り合いの場所、慰安の場所でもあり、いわば社交的性格

が多分にあった。遠く日本を離れて米国各地に渡った初代移民達は、異国の空で苦しい労働に身も心もつかれ果て、語り合う友もなく、淋しい日々であり、ましてや、宗教の話を聞くなどとは思ってもよらぬことであった。このような人々に話し合いの相手となり、慰め、励まし、更に、心の糧としての信仰を説いた人が初期の開教使であり、この開教使を中心として仏教会が各地に設立され、今日の仏教会までに発展したのである。従って、初期の移民達は仏教会に集まるのが最も楽しいことであり、日本人倶楽部の役割りを仏教会が果していたのである。併し、現状は著しく変化したのである。米国に在住する日系市民はハワイの約二十万を入れるならば、恐らく、日本人の血をうけている日系米人の総数は少くとも五十万人以上であろう。その中の大略十六、七万人が仏教会に属する会員であり、それと同数のものがキリスト教会に属し、他の残りが無宗教であると推定されている。勿論この数字は正確な統計によるものではなく、私が二、三の人から聞いた話の程度ではあるが、少くとも日系人の全部が仏教徒ではないことだけは事実である。なぜ日系米人は仏教会に行かないのか。ここにも米国仏教会の一つの大きな問題がある。白人の場合と同様に、若い二世、三世の日系米人にとっては仏教会での老人中心の日本語的フインキには親しめないであろう。彼等は日本人の血を受けているとはいえ、米国社会の中に生れ、育ち、教育されて、ものの考え方、見方、生活態度は全く米国人である。従って、話す言葉も日本語よりは英語の方が自然的であり、家族生活にあっても、英語を解せない親たちとの人間関係は、時としては全く悲劇的できえある。環境的には、欧米人と

同様にキリスト教を受け容れる素地の方が、仏教を受け容れる素地よりもよくできている訳けである。その上に、キリスト教の教会は何んといつても仏教会よりは立派なものが多い。建物や施設の魅力は青年にとつて大きな比重を持つものである。ホノルル別院の如く、外観の偉容は観光外人にさえも大きな魅力である仏教会もあるが、概してキリスト教会に比べれば、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、デンバ、シカゴ、ニューヨーク等の米国では代表的仏教会であっても、それは青年日系米人にとつては大きな魅力とはなっていない。更に、米国で生れ、育ち、教育を受けた彼等は祖国日本を全く知らず、むしろ、心理的には自分等の両親、祖父母の社会的、経済的、教育的な地位や教養から、祖国日本への悪しき連想となり、批判とさえなっている。結局、日本は米国よりも劣つた国であり、その劣つた国で生れた両親なり祖父母の通つてゐる仏教会も亦、キリスト教会に劣るものと類推してゐるのであらう。

私は米国に行つてこのような仏教会の事情を知る前には、日本で考へたことは専ら仏教の白人伝道についてであつた。米国から帰つた開教使にも白人伝道をしっかりやつて下さい、日本移民の尻を追つてゐるだけでは駄目ですよ、と中ば開教使の無能と怠慢をののしりさえしたのである。併し、現地での実状を見て私の考えは變つた。米国の仏教会は、白人伝道に優先して日系米人への完全伝道に努力すべきである。両親、祖父母が仏教徒であり、その血をうけた二世、三世が無宗教であつたり、キリスト教会へ転じて行くことは残念なことである。一番伝道するのに好条件である血のつながりを持つ日系米人

を仏教徒にすることが出来ずして、白人やネグロへの伝道は早すぎるとさえ考えられる。

最後に、米国の各宗仏教会の今後の活躍について、日本の各宗本山は今少し積極的に援助すべきことを提言したい。米国の仏教会、仏教信者を所謂ドル箱と考へてはならない。米国の仏教会は日系米人の苦勞と協力のたまものであり、結晶でさえある。日本の各宗本山の中でハワイや米本土の伝道に対して何ほどの予算を、経費を支出してゐるであろうか。与える援助が出来なければ、せめて外地から取ることだけはやめてもらいたい。外地開教に従事してゐる米国の開教使は、決して生活的にも樂ではないようである。安心して一生を伝道に捧げる決意と勇氣を持たせるためにも、各宗本山は米国仏教会への物心両面の援助が望ましい。何れにもせよ、日本仏教の發展は米国仏教の發展につながり、日本仏教の衰微は又、米国仏教に大きな悪影響を及ぼすことを忘れてはならない。

何れは、米国には米国独特の仏教、「米国仏教」が生れるであろうが、それまでは外地、内地の仏教徒は力を合せて立派な米国仏教の誕生のために努力を続けねばならない。

二 日米仏教文化會議の收穫

米国での日米仏教文化會議の議題として、日本側では三つの案を検討し準備してゐた。「近代社会と仏教について」「仏教の國際的振興について」「近代仏教徒の實踐要綱について」であつた。米国への派遣代表団が出発する前に、日本国内の仏教文化會議が福岡、京都、金

沢、東京等で開催され、最後の東京中央大会では一応の結論がそれぞれの案について作成されていた。併し、米国では「近代社会と仏教」「近代仏教徒の実践要綱」は余り討議の中心課題とはならず、「仏教の国際的振興を中心として日米両国の協力が討議の主要課題となったようである。

今私はここで主としてサンフランシスコ、シカゴとニューヨークでの日米仏教文化会議の模様を要約して述べておきたい。

パークレイ仏教会ホールで開かれた日米仏教文化サンフランシスコ会議には日本側代表全員、北米各宗の開教使、白人仏教徒、仏青、それに婦人会の幹部ら約百名が出席した。この会議では主として米国に於ける仏教の現状と将来への対策とか中心となり、併せて日米仏教徒との提携が強調された。米国側の発言の主なものを要点だけ記しておきたい。

A、「三十年前はアメリカ仏教会も一世が中心であったから、開教使がこれらの信徒を牛耳ることが出来た。併し今は二世、三世の時代に移り、寺院の経営主体はむしろ信徒の手に移った。開教使にとってはおまかることもあるが、責任が信徒の手に移されてむしろ仏教会の経営はうまく行っている。経営面に精力をつかっていた開教使は教化の方に力を入れることが出来る。日本でもお寺は住職のものでなく、信徒のものであるとの自覚があれば、寺院の経営面だけでなく信仰の面でも、門信徒の方から積極的に働き出してくるであろう」

B、「日本仏教は教義中心というか、第一義諦が中心となっており、俗諦というか具体的生活面が余り重く見られていないが、アメリカ

カではむしろこの第二義諦なり俗諦の方が大切で、日常生活での悩みの解決とか、幸福のためにも直接仏教が役立つものでなければならぬ」

C、「言語や習慣の全くアメリカ化された三世、四世への仏教伝道の方法として、適当な指導者、開教使を養成する必要がある。そのためには、一つには二、三世の中から開教使を養成するか、又、一つには日本で中学卒業程度の優秀者を米国に早くから留学させ、アメリカ人の言語習慣を十分身につけさせて開教使にする。年をとった日本の開教使は頭ではアメリカが―言語や習慣―分ついても生活や体までは仲々アメリカ化出来ず、従ってアメリカ化した若い二、三世を指導することはむづかしい」

D、「若い少年時代から仏教会に親しむために、全米にわたってサnder・スクールを持ち、これに力を入れているが、その背後の力となっているものは仏教婦人会である。婦人会自体も今は二、三世となっているが、この人達も子供達の将来のために一生懸命にサnder・スクールの事業に協力している」

ニューヨークの仏教会での日米仏教文化会議では次のような点が討議され、申し合わされた。

A、「留学生の交換」

B、「サンフランシスコに仏教だけでなく、日本文化センターを設立したい。」

C、「現在ワシントンでは、ワシントン大学教授でワシントン仏教友の会の会長であるライデッカー博士と、これに本田氏(米国会図書館

館員で真宗系の僧侶が協力しているが、これらの人を援助してワシントンに仏教センターを設立したい。」

D、「ニューヨーク仏教アカデミーを白人が得度するための登録センターとしたい。ここでは仏教はあくまで一つとなり、たとい宗派的信仰は自由であっても、外に向って宣伝する時には一つの仏教としてやるべきだ。又、このアカデミーに各宗派から英語の話せる学者を派遣し、一年なり二年白人に講義して、その上で試験をして資格を与え、得度して正式の僧侶とする。」

E、「外国では聖職者と俗人とはちがった特権が与えられているが、白人を簡単に得度させ、僧侶を濫造することは警戒すべきである。」

F、「米国では仏教を普及させるには、ただ教義だけでは十分でなく、日本のキリスト教の如くに、社会事業、学校、病院等を経営し、そこから信者を得ることが必要である。又、お茶、お華、習字、日本語、柔道、お琴等の如き一般の日本文化を通して仏教に触れさせることが必要である。ここニューヨークの仏教会には日本から柔道教師を二人招き、若い日系米人を指導しているが、白人の子供も四、五十名いる。」

G、「来るオリンピックの年に日本で第二回の日米仏教文化会議を開催して欲しい。」

シカゴは七十年前に世界宗教大会が行なわれた記念すべき思い出の町であるが、ここでは真宗系、浄土宗、真言宗、日蓮宗、禅宗系の仏教会が七つあるが、日米仏教文化会議はシカゴ仏教会で開催された。

ここでも討議は主としてアメリカ仏教を中心としての発展策についてであった。

A、「日校のプログラムは経験と学力とのマッチした訓練が必要で、知能のまだ低い、経験の乏しい子供に抽象的な話をしては理解出来ない。而も、子供達にはあくまで具体的に仏教徒の家族のメンバーにふさわしい実践要目を説いている。」

B、「仏教もキリスト教と平等の取扱いを受け、精神界に寄与することに努力すべきである。」

C、「若い二、三世用としての英文のテキストが欲しい。各大学に仏教の講座を設けるようにしたい。研究センターと実践センターの二つが必要である。」

D、「日本の各宗本山は米国仏教団を援助せず、むしろその逆であるが、これでは大きな活動は米国では期待出来ない。」

E、「白人の仏教徒の中にはアブノーマルというか、変人も多く、又、仏教会を利用してはいる者もある。大部分はキリスト教に不満な者か、仏教への好奇心からの者もある。」

三 キリスト教団体との交歓行事

我々日本代表団は日米仏教文化会議によって、日米仏教徒の交歓、日米仏教徒の協力に参加したのみでなく、キリスト教団体の人々とも交歓懇談することを得たことも、大きな収穫であったといわねばならぬ。

七十年前にシカゴの万国宗教会議を企画したキリスト教のユニテリ

アン派に属する米國最大のコミユニテイ、チャーチで十月十四日の朝の礼拝に、本格的な仏教式典―法要と講演―を我々日本の代表団が行なったことも興味深く而も歴史的なことである、と同教会の幹部は述べていた。この仏教式典には七百人のアメリカ人が参加し、NBCテレビほかラジオや新聞で報道された。ユニテリアン派は最も進歩的なキリスト教で、キリスト教のみが真理を独善的に宣布すべきではなく、全世界の宗教なり思想から真理を学ぶべきであるとなし、全世界の宗教の方向に進みつつある。多くのユニテリアン教会では十字架をはずしておるとのことである。このコミユニテイ、チャーチでの懇談昼食会でも日本代表団と今後の文献、情報、意見の交換等が提案された。

アメリカのキリスト教界にはこのような全世界的宗教への動きが強く、バハイ教会もその好例であり、又、我々日本代表団が招待を受けて出席した、テンブル、オブ、アングスタンディング（理解の寺）の起工式の記念晩餐会もこの意味で大きな役割りを果たしたと思われる。この理解の寺の発起人として、米國仏教団の花山開教総長も仏教側から名を列ねているが、キリスト教、ユダヤ教、印度教、仏教、儒教、イスラム教各方面の多数有力者が寺院建立のスポンサーとなっている。この寺はその名の如くこれらの諸宗教が、相互の理解と協力によって、宗派を超えて人類の幸福と世界の平和に貢献せんとするものである。仏教国日本の代表がかくも多数出席したことも前例のない、大きな意味を持つものといえよう。

又、我々はニューヨーク滞在中に数回に亘って、インター、フェイ

ス、ムーブメント（凡ての信仰を持つ人々が提携して人間の尊嚴、平等と有愛の保持に貢献しようとする運動）の指導者達と懇談した。彼等は我々日本代表団の来るのを待ちかねた如く、熱心に参加協力を申し出た。この運動の「誓い」として、(一) 信仰や信条によって人間を差別しない、(二) 凡ての人間の個人的価値を認める、(三) 個人が怠慢であるからとて全人類を起訴しない、(四) 如何なる宗派に対してもつまらぬ流言や中傷をしない、(五) 人間の尊嚴、平等、有愛の最高理想実現のため日夜努力する、の五ヶ条が記されてあるが、キリスト教も仏教もこの誓いの下で一致協力することを訴えたのである。

シカゴで開催されたシンポジウム宗教討論会も亦極めて有意義であつたと思う。十月二十一日（日）の午後二時からキリスト教会ピール、チャーチで行なわれたこの公開宗教討論会には、仏教側代表として中村元博士が「仏教とその貢献」について述べ、セイロン国連大使マララセケラ博士は「仏教と近代世界」について述べ、何れも満堂の聴衆に深い感銘を与え仏教への多大の関心を持たせたようであつた。尚この会では、ユダヤ教代表のルイス・マン博士の「近代社会と宗教」人道主義者代表のエドウィン、ウィルソン博士の「科学と宗教」、キリスト教代表のウィンストン、キング博士の「キリスト教と近代世界」がそれぞれの立場から述べられた。ノースト・ウエスタン大学教授のポール・シリップ博士の名司会振りも亦好感がもたれた。勿論シカゴでこのような仏教代表を交えての公開講演は、七十年前の世界宗教大会以来初めてのことである。

又、我々が参拝したハワイのポンチポール墓地、ロスアンゼルス郊

外のホレストローン公園墓地、それにワシントンの国立アーリントン墓地を見て強く感じたことは、これらの墓地が日本のそれに比して極めて清潔で、明るく、而も聖地としての尊厳を保持していることであつた。アーリントンの無名戦死墓地に仏教徒が正式参拝したのは今回が初めてであろうが、國務省の極東補佐官が我々を案内し、鄭重に接待してくれた。又、前記のホレストローン公園墓地は日本の墓地の觀念をはるかに超えた大規模のものである。境内には教会を初め、火葬場、博物館、大ホール、大小に区画された墓地があり、特に興味を持つたのは、地階をもつ大きなビルの大理石の壁に、ミイラにした死体を容れた横棺が引き出し式にはめこまれ、自由に出し入れ出来るのは墓地の新型式とし珍しかった。

四 ヨーロッパの仏教会

ヨーロッパの仏教会を今回は五ヶ所訪問し、種々実状を見せてもらい、又、関係者とも懇談し協議することが出来た。そこではアメリカの日系人中心の仏教会とは全く異つた仏教会が活発な活動が続けている。勿論ヨーロッパでもロンドン大学、ケンブリッジ大学、ハンブルグ大学、ウィーン大学、パリ大学、ライデン大学では、仏教会と併行して多くの学者が印度学、仏教学の研究に従事し立派な成果をあげている。併し、この点はアメリカと同様に、東洋学としてなり印度学としてなりの何れにしても、それは全く知的興味からの学問の対象としての仏教研究であり、信仰や生活としての仏教とは無関係に進められている。仏教学界についての問題は又の機会にゆづるとして、ここに

は私が直接訪問し、懇談した五つの仏教会について報告しておきたい。

A、ロンドン仏教会 (BUDDHIST SOCIETY OF LONDON)

法律家クリスマス・ハンフレイズ氏の主宰するこの協会は、その歴史も四十年、四千冊の仏教図書を持つ図書館と機関誌「中道」ミッドウェイを持つ西欧最大の仏教運動の中心となつている。又多くの仏教書を出版しており、その会員も千名を超えているといわれる。毎月各種の仏教講座も開かれている。余談であるが会長ハンフレイズ氏は、終戦後東京で行われた戦犯の国際軍事裁判に英国側の検事として出席し、その後再び来朝して、日本仏教会の代表者とも懇談し、所謂「仏教十二原理」を発表した人である。十月二十四日午後六時半からの招待懇合に、日本側代表全員出席、協会側の白人会員約三十名とホールで会合した。五戒、三帰依の誓いの後で、ハンフレイズ会長の歓迎の挨拶、日本側代表の挨拶、続いて自由討議、質疑応答で約二時間なごやかな会合であつた。ハンフレイズ会長も私に「とてもよかつた、ほんとにうれしかつた」といって別れの握手をされた。質疑応答の内容を詳しくここに記せないのは残念であるが、今後ロンドン仏教会は日本と西欧との一切の連絡センターとして役立ちたい、近き将来西欧仏教徒会議を開きたい、全仏教徒は協力提携すべきであり、情報を交換したいとの結論が出たのは何よりの収穫であつた。尚ロンドンには他の二つの仏教団体があり、ロンドン以外にも十二の仏教団体がある。

B、ハンブルグ仏教会 (BUDDHISTISCHE GESELLSCHAFT
HAMBURG)



ハンブルグ仏教会訪問

ハンブルグ大学の
東洋研究所を訪ねた
時、この市に仏教会
のあることを知り、
ベルリンへ出発前の
あわただししい一時で
はあったが、車を走
らして私共数名の者
はこの仏教会を訪
れ、会長ステグマン
夫妻と秘書の方に会
い、この仏教会の実
状を聞き今後日本仏
教徒との協力を誓っ
て別れた。尚このス
テグマン会長は実業
家であり、その傍ら
仏教の弘通に努力し
ている人で、会員も
二、三百名あり、機

関誌仏教新聞を発刊し、毎週一回の定例集會と、夏には特別のゼミナ
ーを行い、坐禪、大乘、小乗の講義、討論を行うとのことであった。
現在仏教会は会長宅であるが、近く完成する新しい仏教会館は数百名
を収容出来る立派なものと語っていた。会長室の一室には南方系の仏
像が安置され、書斎には大、小乗に亘る仏教書が数千冊おかれてあ
った。熱心なステグマン会長はヨーロッパの仏教徒大会をこのハンブル
グでやりたいといっていた。

C、ベルリン真宗仏教会 (BERLIN JODO-SHINSHU BUDD-
HISTISCHE GESELLSCHAFT)

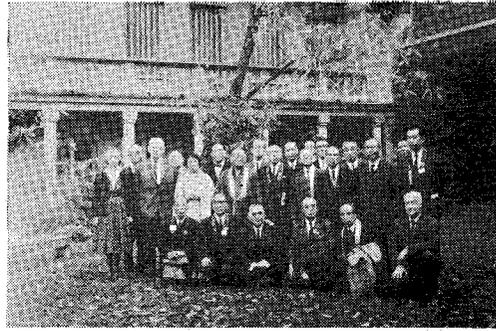
この仏教会を主宰しているハリー・ピーパ氏も熱心な仏教徒であ
り、特に西本願寺系の西ドイツ唯一の仏教会として、内部には小さな
仏教会ではあるが、阿弥陀如来を安置し、親鸞聖人の絵像をかかげ、
聖人の小さな銅像も安置されていた。会員は百名足らずで、毎週木曜
の夜集會を開き、ピーパ氏が説教し、三、四十名が聴講しているとの
ことである。

D、パリ仏教会 (LES AMIS DU BUDDHISME, PARIS)

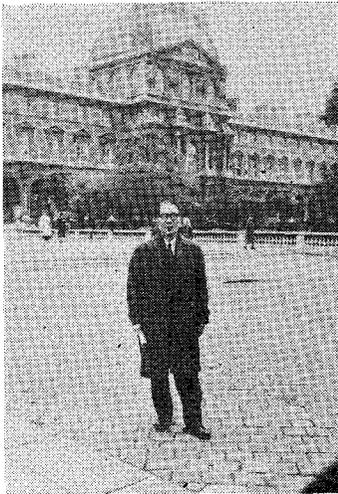
この「パリ仏教友の會」と呼ばれる仏教会を訪ねたのは十一月六日
午後であった。仲々分りにくい場所、定刻をおくれてようやくやくさが
し当てたが、友の會の会員が十二、三名待ち迎えてくれた。創立後三
十四年の歴史を持ち、中国の大虚法師の要請で、フランス人ローズベ
リ女史（現在八五才で訪ねた時も入院中で会えなかった）の努力で創



欧米仏教会の現況と将来



↑パリ仏教友の会訪問



←パリルーブル博物館にて

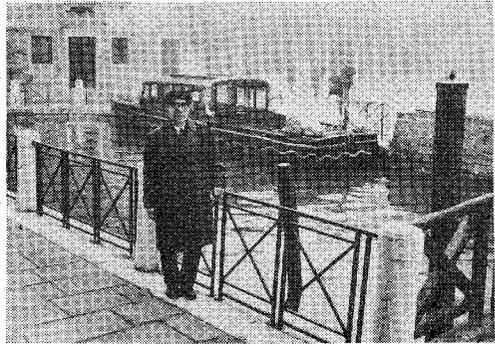
ってお別れした。経済的困難をよく耐えて、この仏教会を守り育てている幹部の方に敬意を表したい。今後お互に協力し、励まし合って行くことを約してお別れした。

立されたもの。会員は殆んどフランス人で四、五百名はいるであろうと世話人は語っていた。機関誌「仏教」を発刊している。現在はビルマのラフラ比丘が指導しているようである。このラフラ比丘を中心に当日集まった会員と仏間で、我々は三帰依文、般若心経を誦経し、比丘はパリ語で誦経した。後で比丘の挨拶、日本側代表挨拶、続いて質疑応答で約二時間懇談し、最後に記念写真をと

E、ウィーン仏教会 (VIENNA BUDDHISTISCHE GESELLSCHAFT)

この仏教会は左程古いものではなく、十年前の創立である。元貿易商であった会長フンガーライダー氏が、全私財を投じて熱心に日本仏教の紹介弘通につとめている。自室を仏教会にしてあるが、毎週一回の定例集会はウィーンの目抜きで行われ、各層のインテリが七、八十名は集まるといふ。一昨年日本にも来訪した会長は、その際とった数百枚のスライドを利用し、ウィーン市内は勿論のこと、全オーストリアを講演旅行で忙しいとのことである。フンガーライダー会長の話によれば、西欧人に仏教を説くことは甚だ困難なことであるが、キリスト教に満足しない人、さらばとて唯物論にも満足し得ない人々に対し、仏教はその中間に立って今こそ、その真価を発揮すべきではあるまいか。

以上の五つの仏教会を訪ね、懇談した際私の強く感じたことは、第一に、英語なり西欧語で書かれた適当なテキストが極めて少いこと。第二に、アメリカと全く異なる状況下にある、これらの仏教会に適当な指導者の無いことである。而も五つの仏教会を熱心に世話している会長は皆俗人であって、経済的にも恵まれない彼等が、仏教のために、献身している姿は全く敬服する。僧籍にもなく、個人的には何の経済的利益の得られない仏教会を、熱心に世話しながら仏法弘通のために莫大な私財をまで投じている彼等の努力、熱意に対し我々日本仏教徒



ベニス葬儀用ゴンドラ

は心から感謝すると共に、出来るだけ協力し援助すべきことを痛感させられた。

最後にヨーロッパで見聞したキリスト教界の現状について一言のべておきたい。

アメリカにも大きな教会もあるが、ヨーロッパ各地には実に立派な、巨大といった感じのする教会が多い。ロンドンのウエストミンスター寺院、セント・ポール寺院、カンターベリー寺院

を初め、イタリアではミラノのドーム寺院、ローマのセント・ピエータがにキリスト教二千年の歴史と伝統を誇る立派なものである。併し、私はこれ等の寺院に参拝して感じたことは、この巨大な見事な寺院が現代の今日どのような役割りを果しているであろうか、ということであった。これらの大寺院は悉くが墓地であり、寺院の地下室や床の上にも到る処に王室や有名人の墓がある。床の上にある墓碑等はうっかりすると土足でふみにじられている。日本では一寸想像出来ない。ロンドンの王室寺院で戴冠式を行なうウエストミンスター寺院内にも多くの王族の墓があるのは有名であるが、観光客は入口に近い処にある墓などはふみつけて歩いている。それにこの寺だけでなく、他の多く

の寺院も拝観料を取っているが、寺院や教会が観光施設化しているのは日本と同様である。経済的にも大寺院は維持経営が困難となっているのである。

このようにヨーロッパでは到る処に大寺院大教会が各地にそびえ立って、その偉容を誇ってはいるが、宗教活動そのものは建物の大きさに比例して必ずしも活発ではないような気がする。魂のぬけた巨大な屍のような淋しさをすら感ぜさせられた。

ローマのバチカン王宮で法皇ヨハネス二十三世との会談は忘れられない思い出である。法皇はいうまでもなくカトリック全教会の首長であり、バチカン国の君主であり、その権力は絶対といわれている。吾々は約束通り十一月十八日十時半よりの法皇との会見にバチカンを訪れた。会談の室は法皇が親しい人と謁見する図書室で行なわれたが、この室に通された時には法皇は既に出て我々を迎えられ、一人々々に歓迎の握手をされた。そして用意されていた黄金の椅子を法皇自らすすめられ、一同着座した。法皇は今年八十二才の老令とは思えない元気で、終始にこにこしながら異例の三十分という長い会談となった。別れる時にも一人々々に法皇手づから記念の銀メダルを渡され、記念写真まで許可され、最後には又一人々々握手してお別れした。この間の法皇の態度はまことになごやかで、微笑しながら挨拶をされ、又日本側の挨拶にも耳をかたむけられていた。「日本は親切な国であり、日本の仏教は清潔な教えであり、今後神の下で皆さんと協力したい、七十年前にアメリカに先輩がまかれた信仰の種が生長した、その土地を訪れたことは意味深いことである。長崎の殉教者、聖ザビエの

ことも書物で読んで知っている」等と語られた。このバチカンを訪れた時は、恰も全世界のカトリック教会の司教以上の人が二千人以上も集まつたの大会議中であつた。数多くの議題がこの公会議で審議検討されているが、結局それは「カトリック教会は如何にして現代社会の中で矛盾なく大きく発展して行くべきか」に要約されるであらう。巨大なカトリック教界にも困難な課題が課せられており、その根もとが大きくゆすぶられているようである。

イタリアを中心とするカトリック教界、米国を中心とするプロテスタント教界、英国を中心とするアングリカン、チャーチは、キリスト教界を支える三つの柱であらう。而も西欧文明を支えてたこれらのキリスト教と、東洋文明を支えてた仏教は、現代文明の方向を決定する最大の力を持っているが、今こそキリスト教と全仏教は善き意味での対決をせまられているような気がする。欧米を旅行して今更の如く宗教の力が如何に偉大であつたかを痛感させられ、今後の宗教に課せられた責任の重大さをも痛感させられた。

(本学教授—宗教学)